

ちいさな芸術家たち ● その1 ピカソのお手本?

子どもはたいていおえかきが大好きです。「絵は苦手」と言うおとなも、子どものころは夢中でおえかきしていたはず。子どもが一心に描く姿は、その楽しさを思い出させてくれます。「おさかな」が描かれたかと思えば、「洗濯機のぐるぐる」に取り込まれたり、「こわくないおばけ」が画面いっぱい登場したり、紙の上の劇場では、心おもむくままに物が生まれ、自由に変化していきます。

いっぽう、ときに子どもみたいな絵などと言われるピカソ。実はピカソ自身が子どものように描きたいと思っていたそうです。

ピカソが描く過程を収めた貴重な映画があります。紙の上に次々と無造作な線が描かれ、増減を繰り返すうちに、ふっと形が立ち上がる。まるで魔法のようです。一筆ごとに絵が生き生きと動き、花かと思えば鳥へ、鳥かと思えば人の顔へと、めまぐるしく変わることもあります。

確かな技術や非凡なセンスを持ったピカソですが、子どものように心を自由にして描いたからこそ、その創造性に人々は驚かされ、心惹かれるのでしょう。



ちいさな芸術家たちにならって、おとなのみなさんも絵筆をとってみるのはいかが?



子どもはだれでも芸術家なんだ。問題は、おとなになっても芸術家のままでいられるかどうかだよ。

パブロ・ピカソ

お料理レシピ ● No.3 甘酒を使ったお菓子

子どもに安心して食べさせられるおやつが簡単に手作りできちゃいます。家庭でつくれる甘酒(アルコールは入っていません)を使って、ほんのり甘いお団子とおいしいクッキーを作ってみましょう。

甘酒白玉団子

材料 白玉粉 150g、甘酒 大さじ4~5、水 適量  
作り方 ①白玉粉に、水で溶いた甘酒を混ぜ、丸める。  
②鍋に水を入れ沸騰させ、その中へ①の団子を入れる。  
③団子が浮かんできたらすくって冷水につける。  
④冷水からすくって器に盛り付ける。



甘酒

材料 柔らかく炊いたご飯 300g、熱湯 300g、麴 100g  
作り方 炊飯器にご飯と熱湯を入れ、よくかき混ぜてから麴を入れさらにかき混ぜる。炊飯器のふたを開けたまま布巾をかぶせ、保温で12~15時間置くと、甘酒の完成! 鍋に移して火にかけ、沸騰させて発酵を止める。

きな粉でアレンジした甘酒白玉団子



甘酒ビスケット

材料 小麦粉 100g、甘酒 大2、自然塩 小1/4、なたね油 大3  
作り方 ①小麦粉と塩を合わせて、フレイにかけける。  
②①になたね油と甘酒を入れ、練らないようにまとめる。  
③まな板などの上に出し、円筒形にして切り分ける(冷凍庫で少し凍らすと切りやすい)。型にとってもかわいい。  
④160度のオーブンで20分焼く。



お砂糖は使わずに作れます

レシピ提供 ● 親子ナチュラルクッキング・サークル 月1回土曜に活動しています。 問合せ先 tel.090-2351-4760 中島 oyakonaturalcooking@yahoo.co.jp

うみかぜだより 2009.4.20 第2号



こんにちは! 「うみかぜだより」です♪♪♪

ある動物たちにとって春は出産シーズン。たとえば、ニホンザルです。毎年3月から7月にかけて赤ちゃんが生まれます。お母さんのお腹にしがみつくと、眩しそうに外の世界を眺める赤ちゃんは、丸い大きな目が印象的です。お母さんとの見つめ合いもあるようです。ただ、どれほど頻繁かと言うと、チンパンジーの母子にはかないません。チンパンジーのお母さんはわが子を見つめて笑いかけもし、その身体をくすぐってあやして遊びもします。ニホンザルのお母さんは赤ちゃんにおっぱいを吸わせるだけでなく、毛づくろいをしたりなど熱心に世話をします。でも、お母さんが赤ちゃんと遊んでやることはありません。ニホンザルの赤ちゃんは、少し大きくなってから同じ年齢や、やや年長の仲間とのレスリングや追いかけっこで遊びの世界にはいっていきます。

遊びはまずは楽しいもの。楽しい経験を人生最初に与えてくれるのはお母さんやまわりのおとなたち…。遊びの導き手がおとなであることは、人間と、人間とともにヒト科に属するチンパンジーやボノボなど大型類人猿が共有する大切な特徴のようです。楽しい、嬉しい、面白い、そ

して、驚いたり、ちょっと悔しかったり。さまざまな感情を赤ちゃんは遊びを通じて育てていきます。

そして、しっかり遊ぶ、真剣に遊びに向き合う。こんな姿も発達する子どもの中に現れてきます。人間の赤ちゃんは、持たされたガラガラを見て、なめて、手でいじくって、それが何かを確かめます。やがて、たんすのひきだしから衣類を全部外に出してしまいます。繰り返し、繰り返し、ティッシュボックスからティッシュを出し続けていたかと思えば、今度は家中の穴といえる穴に(ビデオデッキのカセット挿入口などにも)何かを入れてまわります。お母さんには困った行動も多いですが、どうか一緒に遊ぶ気持ちも忘れないでください。赤ちゃんはいろいろな発見を自らの行動で表現し、お母さんやまわりのおとなと共有したいのです。

赤ちゃんとともに楽しむさまざまな遊び方を人間のおとなは工夫して生みだし、伝えてきました。遊びのプロたる保育士や子育てで活躍する先輩ママにもぜひ相談してみてください。おとなも子どももみんな一緒に「遊ぶ」こと、「うみかぜ」でもさまざまにとりくんでいきたいと思えます。



交流センター2階研修室(13:30~15:00)にて、中島治子さん(ナチュラルクッキング主宰)を講師にお招きし、「うみかぜだより」に掲載された料理のコツや、より一層美味しくつくるためのポイントなどを教えていただく予定です。「うみかぜだよりのレシピは見たけれど難しそう…」 「これ以外にメニューのレパートリーはないのかな?」という方必見!! 実際に見て、聞いて、日頃の献立に活かしてみませんか? 皆様のご参加をお待ちしております♪

うみかぜだより 第2号

発行 子育て応援ラボ「うみかぜ」(竹下秀子研究室) 彦根市八坂町2500 滋賀県立大学人間文化学部 tel.090-7343-2405 fax 0749-26-7235  
編集 上野有理・齊藤亜矢・竹下秀子・広田幸子・丸澤由美子

さあ、冒険の始まりです！

1歳を過ぎると何だかしっかりしてきたような気がします。それでもやっぱり、親という「安心の基地」がそばにあって「基本的信頼関係」を育てているからこそ、安心して行動できるのです。

●家の中を片付けよう！事故の起こりやすい時期です

家の中では子どもの成長に合わせて、片付けたり、注意したりすることが必要になります。たとえば、イスやテーブルなどの角ばったところは危なくないように覆ってください。高いところからの転落や転倒に気をつけましょう。落ちて溺れることもありますのでお風呂の残り湯は抜いておいた方がよいでしょう。

●外の世界を五感を使って体験しよう！親子でコミュニケーションしよう！

親子で周囲のいろんなものを目で見て、手で触れて、鼻でにおいをかぎ、五感をいっぱい使って外の世界を感じとりましょう！その時に子どもと同じ目線で同じものを見ながら視線をかわしたり、指差ししたり、声を出したりして親子のコミュニケーションが始まります。子どもが指差ししたり声



を出すことは本人が興味を持っているサインなのでそのことに共感してあげましょう。

立って歩けるようになると今までより高い目線で周りを見ることが出来ます。何もかも新鮮でヨチヨチとあちこち歩き回ります。外の地面は家の中の床と違って、でこぼこしていたり、じりじりしていたり、固かったり、水溜りがあったり、階段があったり、とても変化に富んでいます！草が生えているとアリやバツに出会ったりします。歩いていると犬や猫を見たり、上を見上げれば青い空と雲、まぶしい太陽や大きな木も見えます。新しい体験は刺激的で楽しくて仕方ありません。

こんなヨチヨチ歩きを積み重ねているう

ちに子どものバランス感覚が向上し、1歳半くらいまでには階段を上ったり、ボールを蹴ったりできるようになります。

冒険に失敗はつきもの

この時期、いろいろなことに繰り返し挑戦します。そうすることによって「体がよく動く！」「できる！」「わたしてすごいぞ！」という自信を育てているのです。

でも失敗することもあります。そんな時はダメねと子どもを否定することはしないで「どうしたの？大丈夫！大丈夫！」などの対応をしてやり、「何かあればいつでも助けてもらえるのだという安心感」を子どもに保障してやるのが大切です。

ふれあい遊び

♪いもむしごろごろ  
わらべうた

いもむし ごろごろ  
ひょうたん ぼっくりこ

お子さんを寝かせ、リズムに合わせて右へ左へあちこちゴロゴロするふれあい遊びです♪

単純ですが、子どもたちは目の前のクルクル変わる世界を楽しんだり、お母さんの声やゴロゴロしてくれる手とのふれあいを喜んだりして、キャッキヤッと声を出して笑います。“もっと〜”と要求するかのようになり、お母さんを見つめたり、お母さんの前に転がったりもしていますよ。



0歳児は、お母さんが抱っこをしてユラユラ揺れる遊び方も楽しいですね。自分からゴロゴロ出来るようになる頃には、お母さんの歌に合わせて、子ども自身で転がったり、お母さんに押してもらったりするのが楽しいようです。



3歳前後になると、お友だちとの輪も広がってくるので、お友だちの肩を持って1列に繋がり、一緒にリズムに合わせて“いもむし”になるのも面白いかもしれませぬ♪

世界の子育て



映画で話題のチェ・ゲバラ、WBCの野球チームと、何かと話題なキューバは、ユネスコがフィンランドと並んで推奨する教育大国です。キューバでは子どもたちはどのような教育をうけているのでしょうか？『世界がキューバの高学力に注目するわけ』（吉田太郎・著、築地書館）から紹介します。

キューバの特徴

・地域ぐるみの子育てが実践されており、「子どもを教育しよう」という家庭教育プログラムは、とくに叱らずに粘り強く愛情を込めて育てることの大切さを強調している。

・さまざまな活動を通じて社会を少しずつ知ることができ、将来社会の一員として貢献できることを実感できる。

・自ら学ぶことを基本的にグループ学習や教え合いを大切にしている。

・尊敬される教師は難関の専門職。フィンランドと同じく、キューバも優秀な学生が教師となり、それがまた優秀な生徒を生むという好循環が働く。

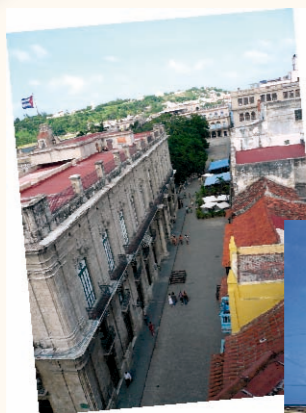
・キューバが開発した識字教育プログラム「ジョ・シンプエド」（直訳すれば、わたしだってやれるさ！）は、中南米、アフリカ、東ティモールなど28カ国に広まり、脱非識字化に貢献している。

キューバの学び方は？

「子どもは社会全体の宝」とされ、愛情深く育てられる。「平和のためにこそ教育が必要」ということで、子どもだけでなく親のための教育も整っている。

世界一、教育に投資をしているといわれる国キューバ。以前は国民の60%以上が、非識字者か平均学力が小学校3年以下という教育水準でしたが、国家の最重要課題として「教育」を掲げ、国民の脱非識字化を目指して、兵舎や警察を学校に変え、コミュニティを巻き込み、さまざまな教育改革を進めていったそうです。

キューバが一層より良い国づくりを目指すことを期待したいですね。



▲ハバナの街並み



ヘミングウェイの小説「老人と海」の舞台となったコヒマルの海辺 ▼